

# *Osaka Literary Review*

**2021**

**No. 60**

大阪大学文学研究科英米文学英語学研究室

OSAKA UNIVERSITY GRADUATE SCHOOL OF LETTERS

ENGLISH LITERATURE AND LINGUISTICS

# 会 則

- 一、会員は大阪大学大学院英文科出身者及び在籍者の内よりこれを構成する。
- 二、会員は所定の会費を納入し、会の活動を維持・促進しなければならない。
- 三、刊行物は年一回発行を原則とし、会員はこれの頒布を受ける。

## 同人名簿（ABC）順

## 令和3年12月現在

足達賀代子	石割 隆喜	三角 成彦	大森 文子	田中 秀治
新井 美幸	伊藤 佳子	美馬 未歩	小川 公代	田中 和也
麻島 徳子	岩橋 浩幸	南 綾希	岡田 禎之	谷 絢美
朝日 勝太	岩橋 一樹	南 佑亮	隠岐 尚子	谷口 一美
飴山 晶子	岩宮 努	光原 百合	大川 裕也	轟 里香
梅林 有美	華 歆歆	宮原 駿	乙黒麻記子	東條 良次
福原 崇太	甲斐 雅之	宮本 裕子	劉 安琦	徳永 和博
後藤 秀子	垣口 由香	溝手 真理	坂口 真理	塚本 亜美
原 千風美	鴨川 啓信	水田 博子	Sanyat Sattar	上里 友子
春木 孝子	金崎 八重	水谷 謙太	須佐美 慧	梅原 大輔
橋本 一平	金田 仁秀	森川 文弘	佐々木つぐみ	山田 雄三
服部 典之	片渕 悦久	森本 道孝	関 良子	山口麻衣子
春木 茂宏	片山 美穂	森本 佳晃	千田 愛	山口 真史
林 日佳理	加藤 純子	森田由利子	瀬谷 泉美	矢野 正昭
林 智之	川原 功司	森藤 庄平	篠 直樹	余 明珠
平井 智子	川島 伸博	村井美代子	篠原 弘樹	米倉 陽子
平川 公子	菊池 由記	村田 知穂	白川 計子	米本 弘一
平松 依世	桐山 恵子	村田 和久	白谷 敦彦	吉田 仁志
平山 裕人	北爪佐知子	永尾 智	鈴江 文子	好井 千代
堀 恵子	小泉 明美	永田 優衣	須磨 千尋	吉井麻里子
堀田 優子	小島 生子	中嶋 彩佳	周 桂君	吉本 圭佑
李 澤坤	米田 亮一	中村 仁紀	鈴木 史歩	吉本真由美
Ian Garlington	香本 直子	仲渡 一美	高橋 信隆	吉野 麻子
市橋 孝道	倉田 光範	新野 緑	武田 雅史	吉本 成美
池田 景子	季 姿岑	西口 暖乃	武内 正美	
生田源太郎	榎原 尚紀	西村 美保	玉井 暲	
伊勢 芳夫	馬渕 恵里	西野 絢子	田中 英理	
石川 玲子	松岡絵梨子	野中美賀子	田中 良子	

# 目 次

OLR 第 60 号 論文掲載一覧表

	頁
一 論 文 一	
“A Sort of Composite Soul, the Soul of Command”: Joseph Conrad, <i>The Shadow-Line</i> における分身関係の表象 .....田中 和也	1
19 世紀中世主義詩学に見られるメタヒストリーの歴史観 .....関 良子	19

# “A Sort of Composite Soul, the Soul of Command”: Joseph Conrad, *The Shadow-Line* における分身関係の表象

田中 和也

## 序論

Joseph Conrad の作品においては、“Heart of Darkness”(1899) のような船乗りを描いた前期作品や、*Nostramo*(1904)、*The Secret Agent*(1907) などの中期の政治小説が、主に人口に膾炙している。その一方で、F. R. Leavis や Thomas Moser、Albert J. Guerard のような初期批評の大家たちは、*Chance* (1913) 以降の後期小説は、彼の才能衰退の証と評価した。この後期作品への低評価は近年見直されつつあるが<sup>1</sup>、その一方で1917年出版の *The Shadow-Line* には一貫して例外的に高評価が下されてきた。この理由には、本作品が Conrad が得意とした海の世界を描いていることがある。またこの小説には、彼自身が船長として勤務した際に、航海が一筋縄ではいかなかった際の経験が生かされていて、そのような自伝性も高評価につながってきた<sup>2</sup>。事実、Conrad 自身の経験をなぞるように、本小説の匿名の語り手は折よく船長職を得るが、その航路は風や船員間の病が理由で、決して円滑には進まない。だが最終的には彼は部下の船員たちと協力をして、何とか中継地点であるシンガポールにたどり着く。*The Shadow-Line* は、Conrad 自身や彼の前期作品が重視してきた、船員間の連帯感や義務感を描いているのである。なおかつ、それらを経て主人公が船員として技量を向上させる姿が表象されるのである。ゆえに本小説は、ビルドゥングスロマンだと解釈されることが多い (Capoferro 21-22; Erdinast-Vulcan 127)。

だがこの小説は、語り手が船長として「成長」していく姿を、必ずしも

素朴に描いているわけではない。たとえば作品の第1章では、語り手が船長職を得るまでの過程が描かれる。だが、彼は周囲の状況を読めないがために容易には船長になれず、作品は航海という本題には中々入らない。だがこの遅延された出だしのおかげで、本作品の語りは決してナイーブなものではないことや、語り手の信頼性に関して、読者は留意せざるを得なくなる（山本 95-103）。このような遅延は、本小説の語りにおいて時間というものを自意識的に用いていることとも響き合う。ゆえに *The Shadow-Line* の語りには、語り手が自身の成長を読者に印象付けるための技法が巧みに駆使されていることが、意味づけられるのである<sup>3</sup>。

このような自意識的な物語言説においては、登場人物間の分身関係は考察に値する。Conrad 作品において、分身のモチーフはしばしば用いられる。例えば *Lord Jim* (1900) では、主人公の Jim が後半の舞台 Patusan に上陸する過程を、悪漢 Gentleman Brown がそのまま辿る。あるいは、*The Secret Agent* (1907) 後半で、Winnie が夫 Adolf を殺害するときに、彼女の顔は亡くなった弟 Stevie に似ていると描写される。だが *The Shadow-Line* に関連して最も注目に値するのは、“The Secret Sharer” (1910) である。この作品では *The Shadow-Line* と同じく、語り手は匿名の新米の船長であり、なおかつ Conrad の船長経験に基づいている。語り手は、他船から逃げてきた Leggatt という船乗りと出会う。Leggatt は、嵐の船上で同僚を誤って殺してしまい、語り手の船に逃げてきたのである。語り手は、Leggatt を自分の“double”だとたびたび描写して肩入れし、Leggatt を匿うことを通じて、逆説的に船長としての自覚を強めていく。また、Leggatt は幽霊のようだとも幾度も描写されるが、*The Shadow-Line* では語り手の乗る船は先代の船長が幽霊となつてとり憑いていると言及される。いわば、物語の素材、内容、語りの構造において、*The Shadow-Line* と“The Secret Sharer”は双子の関係にある。

しかし、“The Secret Sharer”に関しては分身関係への論考が豊富にある

が、*The Shadow-Line* に関しては深掘した論考は少ない。たとえば、Guerard は本作品と“The Secret Sharer”との類似性を指摘しつつも、*The Shadow-Line* では分身関係は「二人ではなくて三人に分かれている」(“the division of the soul is into three not two”) と述べて、語り手、一等航海士 Burns、料理人かつ給仕係の Ransome の名に言及するにとどまっている (32)。あるいは Mark Ellis Thomas は、語り手とその前任の船長との関係を考察している。だが Thomas は、語り手が前任者との「分身に抵抗する」(“resists the doubling”) ことに注目し (230)、彼が前任者の呪いという迷信にいかにかたがたに抗うのかに注力している。近年の Nidesh Lawtoo の論考でも、分身関係については、「『通過儀礼』の変革的経験」(“transformative experiences of ‘initiation’”) のための「模範的な別人格との、ミメシ的なやりとりの不思議な形式」(“mysterious forms of mimetic communication with exemplary alter egos”) と述べるにとどまっている (96)。

そこで本論稿では、語り手との分身関係を考えるにあたり、三人の人物に注目する。一人目の人物は一等航海士にして病床に伏す Burns、二人目は料理人かつ給仕係として語り手を心身で支える Ransome である。三人目は、語り手を船長職に導きつつ、自身も優秀な船長である Giles である。三者への考察によって、語り手の視点の限界が意味づけられる。それにより、本作品が主人公の「成長」を読者に印象付けようとしつつも、実際にはその成長ぶりの限界を顕在化していることを、主張したい。

## 1. Burns との関係

まずは、船長である語り手と職務上で密接な関係にある、一等航海士の Burns について考察する。彼は語り手と同年代の若者で、熱病にかかりつつも航路に同行する。語り手の見たてによれば、そもそも Burns は前任の船長を継いで「臨時の船長職」(“temporary command”) を得ようとしていたが、語り手が着任したことで果たせずに、フラストレーションを抱

いている (52)。さらに Burns は、前任の船長が死後に幽霊となって船にとり憑いているせいで、船が凧にあったり、船員たちが熱病に悩まされたりするのだと、たびたび語り手に話す。作品終盤では、Burns は自身も熱病に悩む中なのに、雨の中甲板に出てきて大笑いをする。その笑いが「悪霊払いの効力」(“exorcising virtue”) をもっていたかの如く、その後の航路は円滑になり (103)、彼の言葉も声音も “sensible” (102) なものになる。このように Burns が幽霊となった船長に関わりなかつそれをおさめたかのように表象される姿からは、ゴシック文学の伝統と響き合うものを読みこめる (Capoferro 33-34)。いわば、Burns は作品中の不合理や超常現象めいた事態、それらへの解決を体現した人物として、語り手に描写されている。

だが、Burns を一概に非合理的なだけの存在だと鵜呑みすれば、語り手の印象に誘導されてしまっている。実際に、前任の船長が愛人を持ったり夜中にバイオリンを弾いたりするなどの奇行で船員を混乱させているときにも、Burns は職務を遂行していた。さらには船長が船上で亡くなった後、Burns は船長代理として船を導き、無事に近隣の街に寄港させている (52)。この点から、船乗りとしての彼の技量と乗員からの信頼は、確かなものだわかる。さらには Burns は語り手と航海する際、熱病や前任船長への執着があっても、航路に関しては理性的である。船が遅滞として進まないために、語り手は the Gulf of Siam において航路を西に向けることを考える。これに対して Burns は、「『死んだ船長に向き合え』」 (“facing that old ruffian”) と妄言めいたことを述べつつも、語り手に反対する (84)。実は Burns のこの判断は、ベテラン船長の Giles が語り手に与えていた助言と符合する (Watt 503)。以上のように Burns は作品中盤では、語り手によって先代船長への奇妙なこだわりが強調されているが、その裏で船員として確かな腕と見識を維持している。Burns の技量は、自分が熱病でありながらも船に乗りたくと、語り手に懇願したときの描写とも通じ

る。その懇願時に Burns は「『あなたも私も船員同士です』」(“You and I are sailors”)と船乗りの連帯感に訴えて、語り手の心を動かす。彼の言葉の重みも自身の職業意識ゆえなのである (57-58)。

上記のような Burns の船員経験や技量は、語り手という若い新人船長の自己賛美のナラティブにおいて、ほころびがあることを示す物語装置となる。彼ら二人は年の若く、技量と心ばえのある船員という点では実は共通していて、分身とも言える。だが、その実 Burns は、語り手の未熟さを照射する役割も果たす。特筆すべきは、そのような Burns の役割は、語り手と彼の邂逅場面から暗示されていることである。語り手は船長職の任命を受けた際、自分が魔法にかかり (“by enchantment”)、おとぎ話 (“a fairy tale”) の人物になったかのように感じている (33)。このいささか子どもじみた有頂天のもとで、語り手は船に乗る。乗船後すぐに船長室に行った際に、彼はおもむろに肘掛け椅子に座る。語り手はその椅子には歴代の船長が座ったこと (“A succession of men had sat in that chair”) に思いをはせて悦に入る。その際に彼は鏡 (“a wide looking-glass in an ormolu frame”) に映る自分を見つ、その鏡越しに一等航海士である Burns がやってくるのに気づき、我に返る (43-44)。いうなれば Burns は登場時点からして、新任船長である語り手の恍惚を乱す存在として、描写されている。

ここで留意されるべきは、語り手がそのように乱されたと感じてしまう際の鏡と時間の描写である。鏡は自己認知を促す道具ではあるが、語り手が鏡像を見て Burns に居心地悪さを抱くときに、彼はどれほどの間自分がうっとりしていたのかと思案する。語り手は自分が船長室に入って二分も経っていないはずだと考え、なおかつ時計の分針はほとんど動いていない (“its [the clock's] long hand had hardly moved”)。ゆえに語り手は、Burns が「自分が無防備に白昼夢にある姿」 (“my unguarded day-dreaming state”) を見たのは「数瞬の間」 (“a mere fraction of a minute”) だろうと



推察する。この状況を裏返すと、数瞬という客観的に計量可能でかつごく短い時間の間に、語り手は主観的な自己像や歴代の船長たちを、事細かに想像しているのである。しかも、船長たちの有り様を君主制に大げさにたとえ、自分はその最新の代表者 (“this latest representative of what for all intents and purposes was a dynasty”) なのだと空想する (44)。さらには、君主制という身分制度を比喩で用いながらも、船乗りの伝統は血統ではなくて経験や義務に基づく (“continuous not in blood, indeed, but in its experience, in its training, in its conception of duty”) という (44)、矛盾した考えを示している (Lawtoo 96-97)。このように、語り手の自己像は大言壮語に彩られ、それがしかも時間という計量的指標ではごくわずかな間で起こっていることに、彼の理想の脆さが見てとれる。

語り手の自己像を考えるに当たっては、船長室の鏡自体も注目に値する。鏡はこの場面で、語り手を自己探求に導いている。語り手が船長になりはじめた己を鏡像を通して確認する姿には、ジャック・ラカンの鏡像段階と共鳴するものがある (Lawtoo 110)。だがその当の鏡自体は、「模造金箔のフレームに入っている」 (“in an ormolu frame”) ものである。いうなれば、ごくありふれた「模造品」に縁取られた道具を経由して、語り手は前述のように、大仰に自分の船長職を考えている。この道具立ては、語り手の理想と現実とを巧みに対比させている。ゆえに、彼の自己意識や船長職に有頂天になる姿に危うさが最初から潜んでいるということが、示唆されているのである。

さらには Burns の人物像を考えると、語り手の自己像が地に足が付いていないことが、なおさら如実になる。Burns に関しては前述のように船員としての技量があると、この邂逅ののちに明白となる。ましてや、Burns は語り手よりも数歳 (“several years”) ほど年上に見えるという。こうした外見やそこから推し量れる船員経験の幾分の差が暗示されつつも、語り手は「自分は若さを置き去りにした」 (“I became aware of what I had left

already behind me—my youth.”)と、「自ら意識する」(“self-conscious”)のである(45)。語り手が自分の成熟ぶりを「自意識的」に考えないといけない点は、それを支えにして彼自身が何とか自分の威厳を保たねばならぬということであり、自らの未熟さを逆照射する。

語り手の未熟さや思い込みの激しさが Burns によって明白となるのは、熱病の特効薬であるキニーネが、船には無いと語り手が気づく場面でも同様である。語り手はキニーネが別の粉末とすり替えられていると気づいたときに、一等航海士である Burns のもとに真っ先に赴く。その際に、Burns がハサミを手にしているのを見て、彼が喉を突こうとしている(“to jab at his throat”)と思い込む。だが実際には、Burns はひげの手入れをおこなっていたに過ぎない(74)。この後、語り手がとり乱す一方で、Burns はむしろ冷静(“composed”)である。さらには、語り手が自責の念を口にする際に、Burns はその考えは愚かだとたしなめる(“That’s very foolish, sir.”)。いわば、語り手がハサミについて思い込むという、コミカルでさえある描写のあとで、彼は同年代の船員である当の Burns に気遣われているのである(76; 78)。Burns の落ち着きは、語り手がキニーネさえあればその“magical”な力で熱病は解決すると、ナイーブに信じていたこととは対照的である(72)。

ただし、Burns と若手船長である語り手との対比は、語り手の人格という彼個人の要素をあぶり出すためにとどまらない。二人の対比は、船の上の世界の特質も鋭利に描く役割をも果たす。奇しくも語り手自身が、肘掛け椅子に座りだしたときに、歴代の船長たちの魂がそこに存在しており、それは「ある種の合成された魂で、指揮の魂」(“a sort of *composite* soul, the soul of command”)なのだ描写する(43; my italics)。このことは歴代の船長間の連綿としたつながりを示す。だがそれのみならず、多くの船員たちが連携して初めて“command”を果たせて操船が可能だということを踏まえると、より“social”なニュアンスも見いだせる(Lawtoo 112-13)。事実、

先述のように、語り手がキニーネ不足で慌てふためくときに、Burns が彼をたしなめる様子も“composed”だと描写される (76; my italics)。いわば Burns が冷静であることや、その冷静さが語り手に印象付けられかつ分かち合われるおかげで、語り手は幾分落ち着きをとり戻しているのである。

注目すべきは、その“composite”な構成員の一人で、船長と直接やりとりをし、最悪の場合は船長の代理をしようのが、Burns が務める一等航海士の役割であるということである。現に Burns は、先代船長の死後で示したように、そのための技量と心がけを確かに有している。語り手は、Burns に当初は不快感を覚え、嵐の後にようやく彼のことを認める。前述のように、Burns と語り手は、若い有能な船員という点で、分身関係だと言える。Burns を巡る拒否から受容へと至るプロセスからは、語り手自身が己の未熟さと向き合えるようになっていく道筋と、対位法的な関係にある。以上のように、語り手には望まれていない分身関係を読み解くと、彼の語りのためらいやほころびが見えてくるのである。これは、Burns の描写に関して幽霊などのゴシック的な描写があるという語りを、括弧にくくるものにもなっている。

## 2. Ransome との関係

前節のように語り手は、Burns に対しては同族嫌悪じみた苦手意識を抱いている。これとは対照的に、語り手は別の若い船員である Ransome に対しては、大きな好感を抱いて接している。Ransome はもともと料理人だが、給仕係が熱病で倒れたことを受けて、ダブルワークをこなすことを志願する。Burns が「この船で最良の船員」(“the best seaman in the ship”)と評するように (56)、彼は船員として高い資質を持つ。しかし Ransome は心臓疾患のために過度な労働は出来ず、料理人となっていた。語り手の航海は Ransome という精神的支え無しにはあり得ず、Ransome はまさに語り手の精神や指揮に“composite”で、二人は分身にあたる存在で

あった。だが、Ransome は最終的には心臓の病を理由に、寄港後に退職を願い出る。語り手は Ransome の必死の嘆願に動揺しつつも、最後にはその決断を受け入れることで、作品は幕を閉じる。以上のように、語り手が船長として指揮を発揮していくことと、彼が Ransome と信頼関係を構築していくことはパラレルな関係にある。だが、語り手が病人を抱えて航海するという難局を乗り越えて、船乗りとしての技量を示すと、その成長を支えた分身たる Ransome は下船するのである。このように語り手と Ransome との信頼関係が構築されてから後に揺らぐ様は、語り手が Burns とは当初馬が合わないが最後には彼を受け入れることとは、対比をなす。いわば、Ransome と Burns は、表裏一体の関係にあるのである。その当の Ransome との出会いと別れは、船長が自身の成長を彩る語り手に、どのような作用をもたらしているのかを、本節は考察したい。

Ransome の表象で注目すべきは、語り手が Ransome と会うたびに、喜びを感じるという描写がたびたび描かれていることである。Ransome 自身は見栄えの良い人物である。語り手は初見時に、Ransome の外見を「遠くからでもわかる均整の取れた容姿で、その物腰には何か全く船員に典型的なものがある」(“Even at a distance his [Ransome’s] well-proportioned figure, something thoroughly sailor-like in his poise”) と描写している (55)。この整った容姿と身のこなしのためか、語り手は「ランサムを見ると嬉しい」(“It was a pleasure to look at him [Ransome].”) と述べるし (60)、「彼の声を聴くと極めて嬉しい」(“His voice was extremely pleasant to listen to.”) と評する (88)。語り手自身は、初めての船長職、しかも部下の多くが熱病に倒れる中、責任感ゆえに悩んでいる。そのような困難の中ではなおさら、Ransome の実直な様子と仕事ぶりは、喜ばしくて頼れる存在であったことは疑いない。

だが語り手の苦難を考慮に入れても、彼は Ransome の視線と微笑に関して過剰にも思える頻度で言及する。例えば Ransome が語り手に船内の

熱病の感染拡大について話しかけると、「Ransome の眼にある何か」(“something in his [Ransome’s] eyes”) が語り手を呼び止める。二人の会話後には、Ransome の眼が語り手の眼をしっかりとらえる (“Ransome’s eyes gazed steadily into mine”)。その後、二人は微笑を交わすが (“We exchanged smiles”)、それはあたかも語り手が熱病やそれで苦しむ人がいることに密かに憤慨していることに、呼応しているかのようだという (“to correspond with my secret exasperation”) (64-65)。この後でも、二人が先代船長の埋葬を話した後では Ransome は「微かな微笑」 (“with a faint smile”) をたたえて部屋を去るし (68)、語り手が熱病になす術がないと悩むときに、Ransome は何とか “his pleasant, wistful smile” を語り手に向ける (78)。また、語り手が激務で寝不足のときに Ransome が起こしに来る際には、語り手は Ransome の顔や微笑や目を見ている (“look up at Ransome’s face, with its faint, wistful smile and friendly, grey eyes”) (81)。さらには、語り手たちが作品後半で夜中に苦労して操船する場面でも、彼は Ransome が微かに微笑する様子や (“a faint smile”)、その顔形や視線に微細なまでに言及する (“the clear, firm design of Ransome’s lips”; “With his [Ransome’s] serious clear, grey eyes”) (93)。上述の各例でわかるように、語り手は Ransome の様子、特に視線と微笑について、過剰なほど丁寧にかつ何度も描写し、両者の間の “non-verbal communication” は読者の目を引く (Hawthorn 52)。それらの過度な描写からは、語り手が Ransome を偶像化さえしていることが読み取れる。

このような子細な視線や外見描写に関しては、*The Shadow-Line* における視覚の表象と、そこから語り手が対象を理想化する姿が透けてみえることが重要である。Burns への分析の際に述べたように、語り手は船長職や自らの船のことを、おとぎ話の世界の存在だととらえている。彼が実際に乗船する直前に船体を見たときには、船からは「生命と人格があると思わせるような、最上の手仕事によって人を魅了させるようなもの」 (“That

illusion of life and character which charms one in men's finest handiwork”) がにじみ出ていると考える。ここで“illusion”や“charms”という言葉遣いで示されるように、語り手は船に過剰なまでの魅力を見出している。そのように視認した後で彼は乗船し(“putting my foot on her deck”)、そこでようやく「深い身体的な満足の感情」(“the feeling of deep physical satisfaction”)を感じている(41)。Jeremy Hawthorn が指摘するように、この場面では、視覚情報(Hawthorn が言う“observed”されたもの)やそれに起因するイメージが、実際に経験された実感よりも優先されている(133-35)<sup>4</sup>。この船や航路への理想化は、のちに風と熱病という現実によって碎かれることになる。

視覚と理想化との関係は、語り手から Ransome への接し方にも通じる。語り手は Ransome の実直な仕事ぶりを当てにし、現に種々の困難を乗り越えることができた。だが、船が風を受けて航路が順調になると、状況が変わってくる。語り手の食事中に Ransome は一時的に舵を握るが、その際に語り手は、自分や船が Ransome に多くを負っている(“very much indebted to you”)と謝意を述べる。だがそれに対して Ransome は、操舵への集中はあるにしても、まるで語り手の話を聞かないかのような(“as though he [Ransome] had not heard me”)素っ気ない対応をする(101)。この後 Ransome が心臓病ゆえに息切れするときにも、語り手は病への不安ゆえに彼から目をそらしてしまう(103)。一言で言えば、二人の間にすれ違いがあることが、暗示され始めるのである。

語り手と Ransome との齟齬は、Ransome が下船を懇願するときに最大値に達する。語り手はその申し出に驚いて彼を見つめ(“looked at him in surprise”)、Ransome は本気ではないだろうと叫ぶ(“cried out”)。しかし Ransome は、自分は病院に行かねばならないし、その権利がある(“I have a right!”)と息を飲みつつ、「粗野なほどに決意した様子」(“a look of almost savage determination”)でもって言い切る。ここにおいてようやく、

語り手の視認と Ransome の実情 (“the humble reality of things”) とが、合致するのである (105-06; my italics)。その後、語り手が彼の下船を受け入れると、Ransome は再び “with a smile and in his natural pleasant voice” でもって、残りの職務に理解を示す (106; my italics)。Ransome はこれまでも語り手に微笑を向けて快い声で話しかけてはいた。だが、彼の微笑は、Burns が劇的かつ激情的な “laughter” をしたことと対比的に、自身の感情を隠すための所作なのだとここでわかる。しかも Hawthorn の指摘する通り (52)、Ransome が語り手と最後の別れをするときには、彼の眼は語り手を捉えさえしない (“His [Ransome’s] eyes, not looking at me”) (109) <sup>5</sup>。

以上のように視認とそれゆえの偶像化・理想化という観点を考えてみれば、語り手と Ransome との分身関係もそう単純なものではないということが意味づけられる。そもそも Ransome は、料理人という船のヒエラルキーでは決して高くない立場の人物であり、なおかつ心臓に不安を抱えている。いわば語り手は、地位的にも身体的にも自分とは乖離のある人物に頼り切っていて、その一方で一等航海士である Burns とは不協和音を奏でている。このような語り手を通じた三者間のねじれた分身関係に、語り手の齟齬が見出せるのである。

### 3. Giles との関係

上述のように分身関係から見える語り手の視点の限界を考えると、*The Shadow-Line* は、Conrad の船員経験に基づく素朴な成長物語であるとは、決して言えない。しかし本小説の分身関係を考えるに当たり、Burns や Ransome ほどの登場頻度は無いが、もう一人重要な人物として Giles 船長がいる。Giles はいわばフリーランスの経験豊かな船長で、語り手が船長になれたのも彼の助言のおかげである。語り手と Giles は、船を渡り歩くという点や船長であるという点では、共通している。だが、Giles には船員経験の深さや年齢ゆえの落ち着きがあることから、一見したところ

二人は分身とは見えがたい。それどころか、語り手が前の船をやめた理由を Giles が尋ねる場面では、語り手は突如として怒り、「この道徳家を黙らせるべきだ」(“I ought to shut up that moralist”) とさえ理不尽に考える (13)。語り手は Giles を「人柄と業績が人々に認められた人物」(“a man of recognised character and achievement”) だと認めつつも (19)、彼の言動には「自己満足」(“self-complacency”) があるとして毛嫌いする (23)。

だが語り手から Giles への嫌悪感が揺らぎ、なおかつ Giles 自身も語り手への評価を変える場面が、小説後半に現れる。しかし、まさにその場面こそが、語り手の成長へ疑念が残る瞬間にもなっているのである。語り手の船が寄港した後で、Giles は語り手を出迎える。当初 Giles は『『親切なおじさん』の微笑』(“with a ‘kind uncle’ *smile*”) を携えて、語り手の労を労う。だが、語り手が『『自分は疲れてはいないが、年を重ねたように感じる』』(“Not tired. But I’ll tell you, Captain Giles, how I feel. I feel old”) と述べる。Giles は語り手の変化を真剣に受け取ったのか、微笑をやめて (“He didn’t *smile*.”)、語り手の話に神妙に聞き入る (107-08; my italics)。その後語り手は、航路を遅らせるわけにはいかないという責任から、休むことなくすぐに航海を続行せねばならないと Giles に告げる。Giles は語り手に同意するが、その際の様子を「あたかも重々しいカーテンが巻き上げられて、予期せぬ Giles 船長の姿が明かされたかのよう」(“as if a ponderous curtain had rolled up disclosing an unexpected Captain Giles”) だという (109)。Ransome の分析で見たように、本小説では微笑というものは、感情の表出を抑制し、ときに真意を糊塗する役割さえ果たす。Giles は、「カーテン」を取り払い、飾り気なしに語り手と向き合う。Giles の真摯な様子は、以前のパターンリスティックな態度を捨てて、語り手を自分と同じ一角の船長と認めたことをにおわせる。ここにおいて、二人とも船長として一定以上の技量を持つこと、すなわち「分身」であることが、読み解ける。なおかつ、その様子に気づけるほど、主人公には人格的に変化が



あることも示されるのである。

だが Giles が語り手の技量を認めて、なおかつ語り手も生身の Giles と向き合う瞬間がありつつも、語り手が成長しきったのかどうかに関しては疑念が残る。Giles が微笑をやめた後も、語り手は彼に対して不遜な態度を取り続けるのである。語り手が自分は年をとったと感じると強調した後、Giles は「『人は人生に起こることを、良いことにしろ悪いことにしろ、過度に重んじ過ぎてはいけない』」（“The truth is that one must not make too much of anything in life, good or bad.”）とたしなめるように述べる。しかし語り手は自身の性急さが批判されたと感じたのか、「『半分の速度で生きろということですか』」（“Live at half-speed”）と述べるという形で、「ひねくれて」（“perversely”）反応する。そのように Giles がたしなめるように話し続けた後、「『君は臆病者ではないだろう』」（“you aren't faint-hearted?”）と語り手に尋ねる。ところが、語り手は「『神のみぞ知るです、Giles 船長』」（“God only knows, Captain Giles”）と「誠実に」答える（“my sincere answer”）のである（108）。このような語り手の性急さや不遜ぶりを見ると、彼が若さと成熟を分ける「シャドウ・ライン」（“a shadow-line”）（3）を超えられたのかは、怪しくなる（Manocha 196-97）。確かに、船長職がもたらす成熟という観点で言えば、語り手と Giles には重なる部分もあるが、むしろその重なりゆえに、語り手の「成長」にはほころびが見えるのである。

## 結論

以上のように、本稿は語り手が Burns、Ransome、Giles の各三者と織りなす分身関係に注目することで、*The Shadow-Line* の語りの戦略を考察した。分身という点では、本小説と双子のような関係にある“The Secret Sharer”を含めて、Conrad 作品では初期から中期の作品が重視されてきた。だが、*The Shadow-Line* という、内容面でも語りの構造でも一見シ

ンプルな物語言説においても、分身は見逃せないと考えられる。

近年は、Conrad 後期作品においては、語りの技法などのテキストの面でも、ジェンダーなどのコンテキストの面でも、再考察が試みられている。その流れの下で、*The Shadow-Line* もまた、古くは Leavis たちが述べたような、素朴な成長物語ではないと評価されつつある。その再評価のためにも、なおかつ彼の他作品とリンクさせるためにも、本小説の分身関係は深掘りされてしかるべきである。このことは、*The Shadow-Line* は単に作者の経験に基づくという伝記的な面ではすくいきれない、Conrad の筆の巧みさを探ることにもなる。後期作品の一見したとつきやすさや、それゆえに才能衰退があるというレッテルの裏に、絶えず自己変革を試みていた彼の姿が見えてくる。そこからは、前期・中期の重々しい作風に注視してばかりでは見えてこない、Conrad 作品の多元性や軽やかささえ見いだせる。ひいては、Conrad に寄せられがちなモダニズム文学の重鎮であるといった文学史上の立ち位置の見直しや、彼がそれらの文学に寄与した貢献への再考にも、つながると考えられるのである。

### Notes

1. たとえば英国コンラッド協会の重鎮である Robert Hampson は、2020 年に Conrad の生涯と批評史を手際よくまとめた伝記 *Joseph Conrad* を出版している。その中でも、後期作品へはかなりの紙面が割かれていて、大家たちが Conrad 作品を彼のミソジニーの現れとみなしたことなどへの修正が試みられている。
2. たとえば F. R. Leavis はこの作品は“comes out of experience that was intimately and urgently personal”(99) だと述べている。加えて、Conrad 自身が手紙やこの作品の“Author’s Note”において、個人的経験を反映させたと強調していることも、たびたび着目されている (Simmons 198; Watt 498)。
3. *The Shadow-Line* における時間表象と語りの戦略との関係については、*Osaka Literary Review* の前号 (2020 年第 59 号) に、拙稿が掲載されている。
4. 船は英語では女性としてみなされることや、語り手が冒頭で「この話は“a marriage story”ではない」と述べていることを踏まえて (3-4)、Hawthorn はこの船の描写は“the captain’s symbolic sexual consummation with his ship bride”を体現している

と考えている (133)。

5. Hawthorn は、語り手と Ransome との非言語的なやり取りに、ホモソーシャルな関係を読み込んでいる (52-53)。この点を踏まえると、いわば *The Shadow-Line* は語り手が男性同士の絆から船 = 女性への関係に移行する姿を描いているとも言える。この移行ぶりは、Cesare Casarino が “The Secret Sharer”、つまり *The Shadow-Line* の「双子」の作品で、語り手が Leggatt という分身から船へと重きを移す様子を主張したことと通じる (240-41)。

### Works Cited

- Capoferro, Riccardo. “Providence, Anti-Providence, and the Experience of Time in *The Shadow-Line*.” *Conradiana*, vol. 47, no. 1, 2015, pp. 17-41.
- Casarino, Cesare. “The Sublime of the Closet; Or, Joseph Conrad’s Secret Sharing.” *Boundary 2*, vol. 24, no. 2, 1997, pp. 199-243.
- Conrad, Joseph. *The Shadow-Line: A Confession*. 1917. Edited with an introduction and notes by Jeremy Hawthorn, Oxford World’s Classics, revised ed., Oxford UP, 2003.
- Erdinast-Vulcan, Daphna. *Joseph Conrad and the Modern Temper*. Clarendon Press, 1991.
- Guerard, Albert J. *Conrad the Novelist*. 1958. Atheneum, 1967.
- Hamspon, Robert. *Joseph Conrad*. Reaktion Books, 2020. Critical Lives.
- Hawthorn, Jeremy. *Sexuality and the Erotic in the Fiction of Joseph Conrad*. Continuum, 2007.
- Lawtoo, Nidesh. *Conrad’s Shadow: Catastrophe, Mimesis, Theory*. Michigan State UP, 2016.
- Leavis, F. R. “*The Shadow-Line*.” *Anna Karenina and Other Essays*, Chatto and Windus, 1973, pp. 92-110. This paper is first published under the title “Joseph Conrad” in *Seawanee Review*, vol. 66, no. 2, 1958, pp. 179-200.
- Manocha, Nisha. “Reading Documents: Embedded Texts in *The Professor’s House* and *The Shadow-Line*.” *Studies in the Novel*, vol. 44, no. 22, Summer, 2012, pp. 186-207.
- Simmons, Allan H. *Joseph Conrad*. Palgrave Macmillan, 2006.
- Tanaka, Kazuya. “‘I Am No Longer a Youngster’: Representation of Time as a Narrative Device in Joseph Conrad’s *The Shadow-Line*.” *Osaka Literary Review*, no. 59, 2021, pp. 17-30.
- Thomas, Mark Ellis. “Doubling and Difference in Conrad: ‘The Secret Sharer,’ *Lord Jim*, and *The Shadow-Line*.” *Conradiana*, vol. 27, no. 3, 1995, pp. 222-34.
- Watt, Ian. “Story and Idea in Conrad’s *The Shadow-Line*.” *Joseph Conrad: Critical Assessments*, edited by Keith Carabine, Vol. 3, Helm Information, pp. 497-512. Originally published in *Critical Quarterly*, vol. 2, Summer, 1960, pp. 133-48.

山本薫。『「自己」の向こうへーコンラッド中・短編小説を読むー』。大学教育出版、2012年。

# 19世紀中世主義詩学に見られる メタヒストリーの歴史観\*

関 良子

## 1. はじめに

中世主義(Medievalism)という用語は、今日では英語文学の研究領域の一つとして認知されるようになった。2016年に *The Cambridge Companion* に Medievalism の巻が加わったことは、この言葉が単なる用語に留まらず、西洋文化・世界の文化を考える上で重要な一つ of 概念・思潮と認識されるようになったことを示す現象だとも言える(D'Arcens)。とりわけ19世紀は中世主義の最高潮として、これまでも多くの研究書で論じられてきた(Jones 21)。ただ、この用語は一方で19世紀の文人が過去の時代に詩の題材や社会のモデルを求めようとする姿勢を指すときに、あまりにも便宜的に都合のよい用語として使われてきたきらいがある。しかし19世紀の文人、特に詩人が過去の時代に詩の題材や社会のモデルを求めようとするとき、その対象は決して中世という一時代に留まるものではない。

例えば、一般的にイギリスの中世主義詩人とみなされる Alfred Tennyson、William Morris、Matthew Arnold らは、ギリシア・ローマ神話を題材にした詩や論考も多く残している。Tennyson には中世アーサー王ロマンスに取材した大作 *Idylls of the King* (1859-1885) があるが、彼は “Ulysses” (1842) や “Lucretius” (1869) のように古代ギリシア・ローマに取材した詩も多く書いている。Morris の *The Earthly Paradise* (1868-70) は、古代ギリシア・ローマ神話に取材した物語と北欧伝説や中世ロマンスに取材した物語が交互に登場する作品である。古代ギリシア神話に基づく彼の前作 *The Life and Death of Jason* (1867) を評する際に、Walter Pater が “The

modern poet or artist who treats in this way a classical story comes very near, if not to the Hellenism of Homer, yet to that of the middle age, the Hellenism of Chaucer” (“Poems” 87; cf. *Three Major Works* 526) という表現を使い、“a word must be said about its [Jason’s] mediævalisms” (87; cf. 527) と言って、そのアナクロニズムを肯定的に評価していたことから、Medievalism という用語は、創成当初から題材の時代区分が厳密に中世に留まるもののみを指すとは限らなかったことが伺える。<sup>1</sup> また、中世擁護者とみなされることの多い Arnold には “Empedocles on Etna” (1852) 等の詩作品もあり、彼はホメロス翻訳論 *On Translating Homer* (1861) を書いたことでも有名だ。そして、それらの作品においても、従来 Medievalism として便宜上まとめられていたような姿勢や主張が見られるのである。

では、彼らがこうした、大括りに言う「過去の時代」に詩の題材を求めたのは何故なのだろうか。そして、それらが便宜的に「中世主義 (Medievalism)」と呼ばれるようになった所以はどこにあるのか。本論文では、19世紀イギリス詩学における中世主義の思潮を、これまでの中世主義研究の文脈ではあまり言及されることのなかった、歴史言説を介して再検討する。その際、援用したいのが Haydn White の *Metahistory* (1973) である。本書の副題は “The Historical Imagination in 19th-Century Europe” で、White は 19 世紀ヨーロッパの歴史家らの歴史解釈を「歴史的想像力」と表現して、そこに見られる文芸的・修辞学的要素を分析している。しかし、歴史の物語性に関する主張や言語論的転回へのコミットゆえに、White の思想は文学研究・批評理論の分野においては、これまで専らポストモダニズムの文脈で論じられる傾向にあった (Ball & Domańska)。本稿は、White の代表的研究書の一つである *Metahistory* の考察対象が 19 世紀の歴史記述であった事実に注目し、同時代の大陸ヨーロッパの歴史家らの問題意識とイギリス中世主義詩のいくつかの作品を照合することで、両者に共通する歴史観をあぶり出すことを目的とする。

## 2. Medievalism の定義

まず Medievalism の定義を確認した上で、Medievalism が歴史言説の文脈では論じられてこなかった理由から探ることにする。<sup>2</sup> Medievalism という用語が初めて使用されるようになったのは 19 世紀である。以下に挙げたのは *Oxford English Dictionary* 第 2 版での定義と初出の例文である。

The system of belief and practice characteristic of the Middle Ages; mediæval thought, religion, art, etc.; the adoption of or devotion to mediæval ideals or usages; *occas.* an instance of this.

**1853** Ruskin *Lect. Archit.* iv. (1854) 194 You have, then, the three periods: Classicism, extending to the fall of the Roman empire; Mediævalism, extending from that fall to the close of the 15th century; and Modernism. (“mediævalism, medievalism,” *OED* 2nd ed.)

例文は John Ruskin の講演 *Lecture on Art and Architecture* からの一文だが、ここで Ruskin は芸術を論じる際の時代を 3 つに区分し、Classicism、Modernism の間にあるべき時代区分を Mediævalism と名づけている。Web 版の *OED* 第 3 版では、これよりも早い用例として 1844 年、1849 年、1851 年の例が挙げられているが、Clare A. Simmons も指摘するとおり、これが「ヴィクトリア朝の造語 (Victorian coinage)」であるらしいことに変わりはない(2)。<sup>3</sup>

一方で、学問分野としての中世主義研究が始まったのは 1970 年代以降である。創始者と目されるのはアメリカの歴史学者の Leslie J. Workman で、学会 International Society for the Study of Medievalism の創設と学会誌 *Studies in Medievalism* の創刊に尽力した。設立当初から同誌にエピグラフとして引用され、この学会のモットーのように使われたのが、以下に挙げる Lord Acton (John Emerich Edward Dalberg-Acton) が 1859 年に書

いたとされる文章だ。

Two great principles divide the world, and contend for the mastery, antiquity and the Middle Ages. These are the two civilizations that have preceded us, the two elements of which ours is composed. All political as well as religious questions reduce themselves practically to this. This is the great dualism that runs through our society. (quoted in Utz & Shippey 5-6)

このように宣言する Acton もまた、中世を古代(antiquity)と切り離し、文明の両輪の一つであると見なしていることが分かる。Workman は中世主義研究が三つの領域——中世の研究(“the study of the Middle Ages”)、時代のニーズに合わせた中世モデルの応用(“the application of medieval models to contemporary needs”)、芸術や思想上の中世的靈感(“the inspiration of the Middle Ages in all forms of art and thought”)——から成ると定義する(Utz & Shippey 5)。学会設立当初の Workman の意図は、従来からある中世研究と中世主義研究とを区別することにあつたため、力点は必然的に第二、第三の領域、つまり、後世の時代における中世モデルの応用や「創られた中世」に置かれることになる。

このような中世主義研究の定義は、現在にも受け継がれている。例えば2013年に出版された Pugh & Weisl の *Medievalisms* では “[D]espite the unpleasantness of historical reality, the Middle Ages is magic: it is continually reborn in new stories, new media, new histories. [. . .] [A]lthough the Middle Ages did in fact end, medievalisms, it appears, will never cease to be reborn.”(Pugh & Weisl 1) と述べられ、中世はある種の魔力を具えたものとして「複数形の中世主義(medievalisms)」として復活を続けると説明されている。冒頭で紹介した *Cambridge Companion* でも、序論の著者



D'Arcens は、Medievalism は「発見された」中世 (the “found” Middle Ages) と「創られた」中世 (the “made” Middle Ages) とに暫定的に区別することができるが、“Looked at more closely, however, the distinction between ‘found’ and ‘made’ medievalism does not hold”と、両者の根源は同じところにあると主張する (2-3)。

ここに Medievalism の思潮が歴史言説の中で議論されてこなかった理由を見出せる。つまり Medieval Studies から切り離されて確立した Medievalism Studies、そして歴史上の中世ではなく、何度も再生産される中世、あるいは新たに「発見され」「創られた」中世である Medievalism は、常に歴史文脈から切り離すところから議論が始まっていたのだ。それは D'Arcens の “ideas of ‘the medieval’ as a conceptual rather than a historical category” (2) という表現からも読み取れる。しかし、二項対立的な思考が崩れて久しい現在、中世主義研究が設立当初の基盤としたような、古代と対立する概念としての中世はもはや成り立つはずはなく、また、先の引用で D'Arcens が述べていたとおり、「創造された」中世と「発見された」中世との間の区別も、最近の中世主義研究では崩れてきている。他方、歴史研究においても、史料編修 (historiography) が歴史の忠実・客観的な説明ではなく、記録者の主観・主張が反映された、創作性を孕んだものであることが指摘されて久しい。その意味で、中世主義と歴史言説との間の境界は徐々に薄れている傾向にあると言えるだろう。

では、19 世紀に過去の時代を詩のモチーフとした、いわゆるイギリス中世主義詩人らと、同時代の大陸ヨーロッパの歴史家らの間には、その歴史観の共通項を見出すことは可能だろうか。ここからは White の *Metahistory* を援用し、その可能性を探りたい。

### 3. 19 世紀の歴史言説

「はじめに」でも述べたように、White は 19 世紀ヨーロッパの歴史家

らの思想を考察するに際し、彼らの思考を“historical imagination”と表現し、その共通項を Metahistory という概念のもと分析した。ペーパーバック版で約 450 ページに及ぶこの長大な研究書の序論で彼は、「歴史学は科学か否か」という今日的な議論に対し“history differs from the sciences precisely because historians disagree”と強調する。科学(physical sciences)が、命題の立て方、論証の仕方、根拠となるデータ等、全てにおいて合意を必要とするのに対し、歴史学は合意のない“disagreement”の状態から始まるものだと言うのである(White 12)。そして“In my view, a historiographical style represents a particular *combination* of modes of emplotment, argument, and ideological implication”(28; italics original)と述べ、それらの様式の組み合わせが個々の思想家の歴史概念の土台を形成し、文体上の特徴を与えると主張し、さらには“In my view, these grounds are poetic, and specifically linguistic, in nature”(29)と主張する。

*Metahistory* 序論に見られる、上記のような歴史記述と詩的言語の近似性という主張は、Hegel について論じた第 2 章で更に深められる。White は Hegel の『歴史哲学講義』(*Vorlesungen über die Philosophie der Geschichte*, 1838)序論を解説する文脈の中で、“Hegel immediately launched into a discussion of *history* as the prose form closest in its immediacy to poetry in general and to the Drama in particular”(88)と説明し、“the historian’s imagination must strain in two directions simultaneously: *critically* [. . .]; and *poetically* [. . .]”(91; italics original)と主張する。そして Hegel が歴史認識を Original、Reflective、Philosophical の 3 つに分類し(White 97)、Reflective history と名付けたものを更に 4 つの種類“Universal, Pragmatic, Critical, and Conceptual”に分類している点を指摘した上で White は、これらは皆“Metonymical”あるいは“Synecdochic”な歴史理解の属性を呈していると言う(99)。例えば Pragmatic history に関して彼は “[Pragmatic histories] strive to *serve* the present, to illuminate the present by adducing

to it analogies from the past, and to derive moral lessons for the edification and instruction of living men.” (White 99; italics original) と述べており、過去の時代から現代へのアナロジーを引き出し、現代人への道徳的教訓を導こうとする点において換喩的・提喩的だと論じている。

このような、Hegel の歴史哲学概念を援用した White の歴史認識論で注目したいのは、White が歴史のもつ詩的要素に注目している点、そして、Reflective history がすべての種類において Metonymical な、あるいは Synecdochic な側面をもつと主張している点である。特に「過去の時代から現代へのアナロジーを引き出し、現代人への教訓を導き出す」という歴史利用の目的は、19 世紀中世主義詩人らが自らの作品に過去のモチーフを利用するときの態度と重なる。有名なのは Arnold の例である。彼が 1853 年出版の *Poems* の序文で次のように主張したことはよく知られている。

The Poet, then, has in the first place to select an excellent action; and what actions are the most excellent? Those, certainly, which most powerfully appeal to the great primary human affections [. . .] The modernness or antiquity of an action, therefore, has nothing to do with its fitness for poetical representation; this depends upon its inherent qualities. [. . .] A great human action of a thousand years ago is more interesting to it than a smaller human action of to-day [. . .]. (Arnold, *Poems* 657)

Arnold がここで、詩人がまず扱うべきは “an excellent action” であり、それゆえに詩人たる自分は過去のモチーフを詩に採用するのだと主張する行為は、上に挙げた「過去の時代から現代へのアナロジーを引き出す」という歴史の Metonymical、Synecdochic な利用と重なり、これこそ大陸ヨーロッパの歴史家らとイギリス中世主義詩人らに共通した歴史観だと言えよ

う。

#### 4. 19世紀中世主義詩人らの歴史認識と historiography

では、White が *Metahistory* の第2部で分析している4人の19世紀大陸ヨーロッパの歴史家のもつ歴史認識とイギリス中世主義詩人らの歴史認識を対照させ、両者の共通項を更に探っていきたい。

White は、Voltaire や Hume といった後期啓蒙主義の時代の歴史思想家は、歴史を Irony の視点から捉えていたと言ひ、続くロマン主義初期の思想家——Rousseau や Edmund Burke ら——は、この Ironic な歴史理解に異議を唱え、自覚的に「ナイーブ(naïve)」な、対照的な歴史観を形成させたと主張する。つまり、歴史研究の方法として「感情移入(empathy)」の効力を信じ、歴史と人間性の両方において、啓蒙主義者らが軽蔑していたような側面への共感を培った(White 37)。ここに、考察対象との間に距離をとる Irony ではなく、Metaphor、Metonymy、Synecdoche といった修辞法の用語で表される歴史解釈が生まれたのである。

ここで注目したいのは、White が *Metahistory* 考察に際し、ロマン主義初期の思想家の時代に続く1830年から1870年に、特に力点を置いたという点である。

It also accounts for the particular tone of historical thinking during its second, “mature” or “classic,” phase, which lasted from around 1830 to 1870 or thereabout. This period was characterized by sustained debate over historical theory and by the consistent production of massive narrative accounts of past cultures and societies. (White 38)

彼はこの時期を、歴史理論についての議論が継続的に行われ、過去の文化・社会についての大部な物語が書かれた時代と位置づけ、“It was during this

phase that the four great 'masters' of nineteenth-century historiography —Michelet, Ranke, Tocqueville, and Burckhardt— produced their principal works” と説明する(38)。このような時代区分法は、Walter E. Houghton の *The Victorian Frame of Mind* (1957) の例にあるように、19世紀イギリス文学研究でもよく使われるものであり、Arnold、Tennyson、Morris の中世主義的な詩作品が書かれたのも、この時期と重なる。さらに White は、以下に挙げるとおり、上述の4人の歴史家の historiography を、同時代の小説家のそれと重ねている。

Like their contemporaries in the novel, the historians of the time were concerned to produce images of history which were as free from the abstractness of their Enlightenment predecessors as they were devoid of the illusions of their Romantic precursors. But, also like their contemporaries in the novel (Scott, Balzac, Stendhal, Flaubert, and the Goncourts), they succeeded only in producing as many different species of “realism” as there were modalities for construing the world in figurative discourse. (White 39)

このように White は、当時の歴史家らが啓蒙主義の先人たちによる抽象的な歴史像を生み出そうとしながら、結局はリアリズムの断片を提示するのみになっていると分析する。この分析の中に、歴史記述と小説記述との間の境界線の消滅を見出すことができる。これ以降 White は、4人の歴史家の歴史記述(historiography)を具体的に考察するのだが、彼が historiography という語を用いるとき、その意味内容は史料編修だけに留まらず、歴史記述の文体をも含んでいるため、以後、歴史の「書きぶり」という訳語を当てる。

White が最初に注目するのは Michelet である。彼は Michelet がロマン

主義的な世界理解を科学的洞察という位置にまで高める手段を見つけた点を評価し、“For him, a poetic sensibility, critically self-conscious, provided the accesses to a specifically ‘realistic’ apprehension of the world.”(149)と述べている。『フランス革命史』(*Histoire de la revolution*)での彼の書きぶりについて White は “His description of the spirit of France in the first year of the Revolution is a sequence of Metaphorical identifications”(151)と説明しているが、このように説明される Michelet の書きぶりを、White の引用をもとに具体的に見てみたい。

France, he [Michelet] wrote, “advances courageously through that dark winter [of 1789-90], towards the wished-for spring which promises a new light to the world.” But, Michelet asked, what is this “light”? It is no longer, he answered, that of “the vague love of liberty,” but rather that of “the unity of the native land” (440). The people, “like children gone astray, . . . have at length found a mother” (441). (White 151)

フランスが「暗い冬の中を勇敢に前進する」と表現する Michelet の文体には、確かに Metaphor が駆使され、詩的表現が目立っている。

Michelet の書きぶりのもう一つの特徴として White が挙げるのは、上記引用の最後にある、人民が「子供のように道に迷っていた」という表現にも見られるとおり、民衆に注目している点である。『19世紀の歴史』(*Histoire du XIXe siècle*)序文で Michelet は次のように書いている。

Yes, each dead person leaves a little goods, his memory, and demands that someone take care of it. For him who has no friends, a magistrate must care for it. [ . . . ]

This magistrate is History. . . . Never have I in my whole career

lost sight of this, the Historian's duty. I have given to many of the dead too soon forgotten the aid of which I myself will have need.

I have exhumed them for a second life. (quoted in White 159)

このように彼は、歴史の役割を「死者の記憶を守る役人」と見なしているわけである。

Michelet のこのような、記録されなければ忘れ去られてしまうような、歴史の中の民衆に注目する歴史認識は、Morris の中世主義的な詩に見られる意識と重なる。出版された詩集としては Morris の第一作となる *The Defence of Guenevere and Other Poems* (1858) には、Thomas Malory に基づくアーサー王ロマンスに取材した詩の他にも Froissart の年代記に取材した詩がいくつか所収されており、それらの詩で Morris は、年代記にも登場しない無名の騎士たちに概して注目する。例えば“Sir Peter Harpdon's End”では、イングランド軍に従軍する無名の騎士 Peter Harpdon が、紆余曲折の末、実在の歴史上の人物である、敵軍フランスのゲ克蘭 (Guesclin) とイングランド軍の上司シャンドス (Chandos) の面前で、まるでチェスのゲームのように命を奪われる (“your life hung upon a game of chess” / W. Morris 1:51) 様子が、劇詩の手法<sup>4</sup>を用いて生々しく描かれる。次に引用するこの詩の結びで、何も知らない恋人 Alice が Peter Harpdon の死の知らせを受けたのち、外で男たちが歌う Launcelot を讃える歌を耳にして、自分の恋人も同様に歌に記憶されるべきだと言って、物語を綴ると無邪気にも決意する場面は、それまでの劇詩で敵・味方双方のもつ残忍さを目の当たりにした読者には、皮肉に響く。

Yea, some men sing, what is it then they sing?

Eh? Launcelot, and love and fate and death;

They ought to sing of him [Sir Peter Harpdon] who was as wight

As Launcelot or Wade, and yet avail'd  
 Just nothing, but to fail and fail and fail,  
 And so at last to die and leave me here,  
 Alone and wretched; yea, perhaps they will,  
 When many years are past, make songs of us;  
*That I should make a story in this way,*  
*A story that his eyes can never see.* (W. Morris 1: 60; italics added)

また、1857年ごろに書いたと推定される未完の劇詩 *Scenes from the Fall of Troy* においても、Morris は Priam に、トロイア軍の手で殺されたギリシア軍の兵士たちに思いを馳せさせ、さらには彼らが本国に残してきた母や妻についても言及させている。

And they, how many of them are dead, slain  
 By our good spears; the autumn damps have slain  
 Full many *a mother's son*, those who are left  
 Keep growing gaunt and ugly as thin wolves  
 While we feed fat; *their white wives left behind*  
 Are childless these nine years, or take new lords  
 And bear another breed of hostile sons.  
 The houses they all loved, far off in Greece,  
 Are painted fresh by men they knew not of;  
 Within the cedar presses the gold fades  
 Upon the garments they were wont to wear;  
 Red poppies grow now where their apple-trees  
 Began to redden in late summer days;  
 Wheat grows upon their water-meadows now



And rains pass over where the water ran,  
The ancient boundaries of their lands are changed.  
(W. Morris 24: 9-10; italics added)

Dianne F. Sadoff は、*The Defence of Guenevere and Other Poems* での Morris の創作意図が、ラファエル前派的な絵画を詩で創作することよりも、人間の葛藤を表現することにあったと分析する(11)。また Florence Boos は「フロワサルによる百年戦争の記述は、マロリーの伝説よりも具体的な歴史的基盤を提供した」と述べ、出版当時に *Literary Gazette* 誌に掲載された書評から、次のような表現を紹介している。

Tennyson writes of mediæval things like a modern, and Mr. Morris like a contemporary. [. . .] Tennyson is the orator who makes a speech for another; Mr. Morris the reporter who writes down what another man says. (Boos; Faulkner 33-34)

さらに Boos は、初期の詩作品で Morris が戦闘に注目していることについて、若き Morris の念頭にヨーロッパ各地の 1848 年革命や 1853-56 年のクリミア戦争への関心があったのではないかという興味深い見解を示している。

このように、百年戦争やトロイア戦争に取材した詩において Morris は、記録や年代記に残らず忘れ去られてしまった無名の民衆に注目し、彼らが奮闘する様子を、*Literary Gazette* 誌の書評にあるとおり「記録者(reporter)」として記述しており、その歴史認識は、歴史を「死者の記憶を守る役人」と見なす Michelet のそれと重なる。また、このように無名の民衆に注目し、彼らが歴史の中で悪戦苦闘する姿を、劇詩の手法を用いてリアルに描写する姿勢の中に、後年の Morris の芸術観・社会観に見られ

る民衆重視の考え方を、初期の詩作にも垣間見ることができるのである。

2人目の考察対象 Ranke に関して、彼のいわゆる実在論的な史料編修 (realistic historiography)、歴史主義 (historicism) の基盤には、ロマン主義の否認があると White は説明する。Ranke はロマン主義的衝動を抑制することで、実際に過去に起こったことだけを語ろうとしているというのである (White 163)。しかし、そのような歴史の書きぶりに至った過程には、青年期の Ranke 自身が Walter Scott の描く騎士道物語の世界に魅了された経験があると White は指摘する。Ranke は Scott の小説を読み、中世という時代をもっと深く知りたいと思い中世の史料に当たったが、Scott の描く世界の多くが空想の産物であることを知り落胆し、さらには史実の方が小説よりも魅力的であると発見した結果、White が呼ぶところの「教義的リアリズム (doctrinal realism)」(164) を目指すようになったというのである。

ただ、このような科学的分析を目指した Ranke の書きぶりにも修辞学的特徴が見られると White は説明する。Ranke は歴史で何が起こったのか、なぜそれが起こったのかを史料から明らかにしようとするわけだが、“In short, the historical field is first surveyed as a complex of dispersed events related to one another only by the strands and threads that make them an arras web of event-context relationships” (178) と White が説明するとおり、歴史は散在する出来事の複合体の中から出来事とコンテクストの関係性を編み上げていくことで、部分と全体を統合させていく。その意味で “Ranke conceived history, then, in the mode of Synecdoche.” と White は判断するのだ (178)。

3人目の歴史家 Tocqueville について White は、彼は歴史家の仕事を治療的 (therapeutic) なものと捉えていたと説明する (204)。Tocqueville にとって歴史家の仕事は、貴族政治と民主政治の両方の原理がいかにヨーロッパ文明の中にある一つの永続的な衝動として機能していたかを示すこ

とによって、新たな社会制度の創造を手助けすることであった(White 199)。そのために彼は、歴史思想を “to ground living men in a situation of choice, to enliven them to the possibilities of choosing, and to inform them of the difficulties attending any choice they might make” という目的のために使った(White 206)。このように考える Tocqueville にとって、歴史は過去と現在だけでなく、未来をも繋ぐものであったと White は説明する。彼は、社会の概念の複数の選択肢の間だけでなく、過去と未来との間、そして現在と未来との間を調停すること (“to mediate not only between alternative concepts of society and between the past and the present, but between the present and the future as well”)こそ、自分の使命だと考えていたわけである(White 206)。Tocqueville の主著『アメリカのデモクラシー』(*De la démocratie en Amérique*)は、それゆえ “look forward to the future with the salutary fear which makes men keep watch and ward for freedom, not with that faint and idle terror which depresses and enervates the heart”(quoted in White 208)と呼びかける、読者への意味深長な訓告で締めくくられる。

Tocqueville が歴史の役割に見出した治療的要素は、Arnoldが “The Study of Poetry”(1880)で “we have to turn to poetry to interpret life for us, to console us, to sustain us.”と述べた際に見出していた詩の役割と重なる(Arnold, *Essays* 2)。また、歴史を過去、未来、現在を繋ぐものと捉える見方は、Tennyson のいくつかの作品に見られる思想とも重なる。例えば Tennyson の “Ulysses” は次のように述べて、自分の存在を過去に会ったすべてのものと、無限に境界線が消える未知の世界にある未来のものによって定義づけようとする。

I am a part of all that I have met;  
Yet all experience is an arch wherethrough

Gleams that untravelled world, whose margin fades  
 For ever and for ever when I move. (A. Tennyson 142)

また、*Idylls of the King* の作品世界について、Tennyson が<sup>5</sup> “It is not the history of one man or of one generation but of a whole cycle of generations”と述べていたと息子 Hallam Tennyson が伝記で述懐しているが(H. Tennyson 2:127)、そのような姿勢とも重なるのだ。さらには Morris が古建築物保護協会(Society for the Protection of Ancient Buildings)での講演で述べたロマンスの定義、“what romance means is the capacity for a true conception of history, a power of making the past part of the present”(M. Morris 1:148)とも呼応する。

White が最後に挙げるのは Burckhardt である。彼は Burckhardt の書いた『イタリアのルネサンス文明』(*Die Cultur der Renaissance in Italien*, 1860)について、“The essay had no proper beginning and no end, at least no end that was a consummation or resolution of a drama. It was all *transition*.”(246; italics original)と述べ、ルネサンスは中世と現代という二つの「暴政(tyranny)」に挟まれた「幕間劇(*entracte*)」あるいは「自由劇(“free play”)」であるかのような書きぶりがなされていると分析する(White 247)。また、Burckhardt の死後出版の書籍『世界史的諸考察』(*Weltgeschichtliche Betrachtungen*)から、自身の歴史の書きぶりについて述べている Burckhardt の言葉を引用して、“Burckhardt’s historiography ‘lays no claim to system’; his historical pictures, he candidly admitted, were ‘mere reflections of ourselves’”(White 259)と論じている。

このような時代判断も、例えば Arnold が以下に挙げた詩 “Stanzas from the Grande Chartreuse”(1855)で表現した時代認識と重なる。

Wandering between two worlds, one dead,

The other powerless to be born,  
With nowhere yet to rest my head,  
Like these, on earth I wait forlorn (Arnold, *Poems* 305-06)

Burckhardt の場合にはルネサンスという時代の断片が、Arnold の場合には彼の生きる 19 世紀という現在が、中間世界としてそこに存在し、歴史を扱う者は、Burckhardt の表現にあるとおり、鏡像のようにそれを覗くのである。

## 5. おわりに

本稿では、歴史言説が中世主義研究の文脈でこれまで言及されてこなかった理由を、中世主義研究が成立する過程より考察した後、White の *Metahistory* を援用して、19 世紀大陸ヨーロッパの歴史家らの歴史観・歴史記述の特徴を確認し、それらが 19 世紀イギリスの中世主義詩人らの歴史観・過去のモチーフの扱い方とどのような共通点をもっているかを分析した。1970 年代に Medieval Studies と袂を分つ形で成立した Medievalism Studies は、歴史上の中世ではなく「創られた中世」に力点を置いたため、歴史文脈から切り離すことから議論が始められ、それゆえに歴史言説への言及がこれまで見られなかった。しかし、歴史の持つ修辞的学要素や詩的要素を分析する White の *Metahistory* を介して見ると、歴史と文芸創作の書きぶりに接合面を見出すことができるのである。

また、19 世紀に造語された際、Medievalism は Classicism や Modernism とは区別される様式を示すとして、とりわけ中世を古代と切り離す言葉として使われていたが、Pater の Morris 評に見られたように、中世主義詩学に関して言えば、当初から詩の題材の時代区分が厳密に中世に留まるもののみを Medievalism と捉えるとは限らなかったことが分かる。「はじめに」で引用した Pater の Morris 評に見られた、“[the Hellenism] of the mid-

dle age, the Hellenism of Chaucer” という表現が見られる直前のパラグラフで、Pater は詩で過去のモチーフを扱うことについて、次のように述べている。

In handling a subject of Greek legend, anything in the way of an actual revival must always be impossible. *Such vain antiquarianism is a waste of the poet's power.* The composite experience of all the ages is part of each one of us; to deduct from that experience, to obliterate any part of it, to come face to face with the people of a past age [...] is as impossible as to become a little child, or enter again into the womb and be born. But though it is not possible to repress a single phase of that humanity, [...] *it is possible to isolate such a phase, to throw it into relief, to be divided against ourselves in zeal for it* [...]. We cannot conceive the age; *we can conceive the element it has contributed to our culture; we can treat the subjects of the age bringing that into relief.* Such an attitude towards Greece, aspiring to but never actually reaching its way of conceiving life, is what is possible for art. (Pater, “Poems” 86-87; cf. *Three Major Works* 526; italics added)

過去の時代を忠実に再現することは不可能であるだけでなく、「詩人の力の浪費」であると Pater は主張し、過去の時代の要素が自分たちの文化に与えた影響を含めてレリーフにすることだけが、芸術にとっては可能であると言うのだ。

歴史の中に現代への Metaphor を見出し、無名の民衆に注目しながら史料編修を行なった Michelet、史料の客観的・科学的な処理を試みながらも、必然的に出来事の一つ一つを連関させる中で、部分で全体を捉えようとする Synecdochic な歴史理解を行なった Ranke、歴史を過去と現在を繋

げるだけでなく、未来をも繋げるような史料編修を行なった Tocqueville、自身の生きる時代を過渡期的時代と捉え、同じく過渡期的な時代であるルネサンスの歴史研究に没頭した Burckhardt——彼らの歴史観と史料に対する向き合い方は、イギリスの中世主義詩人らの歴史観、過去の時代に詩の題材を求めた理由と重なる。

4人の歴史家の考察に入る前に White は、ドイツでは1810年、フランスでは1812年に歴史学の教授職が確立されたという大陸ヨーロッパと比して、イギリスで歴史学が学問分野として成立したのは遅く、1866年以降だったと述べている(135-36)。このことを併せて考えてみても、19世紀のイギリス詩人が歴史的なモチーフを詩の題材に選んだのは、ジャンルの違いこそあれ、大陸ヨーロッパの歴史家らによる「歴史の書きぶり(historiography)」と共通する問題意識のもと、歴史を詩の中に書き留めようとしていたのだと考えられよう。

*Metahistory* が発表されたのは約半世紀前のことであり、White の論旨はいかにも構造主義的で、すべてがきれいに割り切れすぎているという印象は否めない。また、White の論をなぞり、4人の歴史家の歴史観・歴史記述の方法にイギリス中世主義詩人らの歴史観・過去のモチーフの扱い方を照合させた本稿での試みも、単純化し過ぎているという批判を免れないだろう。しかし、一度これまでの議論で置かれていた古典・中世の間の線引きを取り払い、別の構図から構造主義的な手法を用いて、いわゆる Medievalism の根底にある歴史観を、歴史言説を援用して整理し直すことで、文学・文化研究の中で市民権を得るに至った Medievalism という現象の、新しい理解に繋げることができないのではないだろうか。

## 註

- \* 本論文は第13回日本英文学会関西支部大会(2018年12月8日開催)での口頭発表の内容に、大幅な修正を加えたものである。口頭発表の内容は科研費研究(若手B)「19世紀英詩における同時代主義と懐古主義の相克」(課題番号26770102)の研究成果に基づき、論文執筆にあたり加えた修正は、科研費研究(基盤C)「唯美主義と政治性の接点——モリス、バーンジョーンズ、クレインを中心に」(課題番号19K00394)の研究内容に大きく関連するものである。
- 1 PaterのMorris評は*The Earthly Paradise*第1巻が出版された際に書かれたもので、1868年に*The Westminster Review*に発表された。その後Paterは、書評の残り四分の一を*The Renaissance*(1873)の“Conclusion”として再掲し、残りの部分に、Morris論を当時の詩の特徴として一般化するような軽微な修正を加え、“Æsthetic Poetry”という表題のエッセイとして*Appreciations*(1889)に発表している。その後、*The Renaissance*の結論部は第2版で削除された後に、第3版以降、再び掲載されるようになったことは有名である。“Æsthetic Poetry”もまた、第2版以降には削除されるという数奇な経緯をたどる。以下、本稿の引用にはPeter Faulkner, ed. *William Morris: The Critical Heritage*に載録された書評“Poems by William Morris”を用いたが、参考までにWilliam E. Buckler, ed. *Walter Pater: Three Major Texts*に載録された“Conclusion” to *The Renaissance*(pp.217-20)と“Æsthetic Poetry”(pp.520-28)での該当ページも併記する。
  - 2 Medievalismという用語の19世紀の使用例および20世紀後半のMedievalism研究の成立過程については、拙著*The Rhetoric of Retelling Old Romances*序論により詳細な説明がある(Seki 3-10)。
  - 3 19世紀におけるMedievalism(当時はMediaevalismと綴られることの方が多かった)という単語の使用例と語義についての研究には、他にDavid Matthews, “From Mediaeval to Mediaevalism: A New Semantic History”やKarl Fugelso, ed. *Defining Medievalism(s)*(Studies in Medievalism XVII)等がある。
  - 4 ヴィクトリア朝詩において「劇詩の手法(dramatic technique)」とは、単に戯曲の技法で書かれている、あるいは劇的独白dramatic monologueで書かれているといった形式的な特徴を指すだけでなく、詩人と作品内人物とを切り離す、読者と作品内人物との間に距離を置く等の、作品内容上の効果をも指すものであった。詳しくは拙論“The Young William Morris and the Discussion of the ‘Dramatic’”を参照。

## 引用文献

- Arnold, Matthew. *Essays in Criticism: Second Series*. Macmillan, 1888.  
 ———, *The Poems of Matthew Arnold*. Edited by Kenneth Allott & Miriam Allott, 2nd ed., Longman, 1979.



- Ball, K. and Domańska, E. "Hayden White." *Literary and Critical Theory — Oxford Bibliographies Online*. Oxford UP, 30 Oct. 2019. <https://www.oxfordbibliographies.com/view/document/obo-9780190221911/obo-9780190221911-0084.xml> Accessed 25 Aug. 2021.
- Boos, Florence. "Introduction, 'Concerning Geffray Teste Noire.'" *COVE: Collaborative Organization for Virtual Education*, 8 Oct. 2019. [https://editions.covecollective.org/edition/concerning-geffray-teste-noire/introduction-\"concerning-geffray-teste-noire\"](https://editions.covecollective.org/edition/concerning-geffray-teste-noire/introduction-\) Accessed 25 Aug. 2021.
- D'Arcens, Louise, editor. *The Cambridge Companion to Medievalism*. Cambridge University Press, 2016.
- , "Introduction: Medievalism: Scope and Complexity." D'Arcens, pp.1-13.
- Faulkner, Peter, editor. *William Morris: The Critical Heritage*. 1973. Routledge, 2013.
- Fugelso, Karl, editor. *Defining Medievalism(s)*. (Studies in Medievalism XVII) D. S. Brewer, 2009.
- Houghton, Walter E. *The Victorian Frame of Mind, 1830-1870*. 1957. Yale UP, 1985.
- Jones, Chris. "Medievalism in British Poetry." D'Arcens, pp.14-28.
- Matthews, David. "From Mediaeval to Mediaevalism: A New Semantic History." *The Review of English Studies*, vol. 62, no. 257, 2011, pp. 695-715.
- "medievalism." *Oxford English Dictionary*, 2nd ed., CD-ROM (v.4.0), Oxford UP, 2009.
- . *Oxford English Dictionary*, 3rd ed., online, Oxford UP. 12 November 2018.
- Morris, May, editor. *William Morris: Artist, Writer, Socialist*. 2 vols. Edition Synapse, 2005.
- Morris, William. *The Collected Works of William Morris*. Edited by May Morris, 24 vols. Longmans Green, 1910-1915.
- Pater, Walter. "Poems by William Morris." *William Morris: The Critical Heritage*, edited by Peter Faulkner, Routledge & Kegan Paul, 2013, pp.79-92.
- . *Walter Pater: Three Major Texts*, edited by William E. Buckler, New York UP, 1986.
- Pugh, Tison & Angela Jane Weisl. *Medievalisms: Making the Past in the Present*. Routledge, 2013.
- Sadoff, Dianne F. "Erotic Murders: Structural and Rhetorical Irony in William Morris' Froissart Poems." *Victorian Poetry*, vol.13, no. 3/4, 1975, pp.11-26. *JSTOR*, [www.jstor.org/stable/40001828](http://www.jstor.org/stable/40001828). Accessed 25 Aug. 2021.
- Seki, Yoshiko. *The Rhetoric of Retelling Old Romances: Medievalist Poetry by Alfred Tennyson and William Morris*. Eihōsha, 2015.
- . "The Young William Morris and the Discussion of the 'Dramatic': Defending 'The Defence of Guenevere'." *Kansai English Studies*, vol.1, 2007, pp.59-81.

- Simmons, Clare. *Popular Medievalism in Romantic-Era Britain*. Palgrave Macmillan, 2011.
- Tennyson, Alfred. *Tennyson: A Selected Edition*. Edited by Christopher Ricks, revised ed., Pearson Longman, 2007.
- Tennyson, Hallam. *Alfred Lord Tennyson: A Memoir*, 2 vols. 1911. Replica Books, 1999.
- Utz, Richard and Tom Shippey, editors. *Medievalism in the Modern World: Essays in Honor of Leslie J. Workman*. Brepols, 1998.
- White, Hayden. *Metahistory: The Historical Imagination in Nineteenth-Century Europe*. 1973. Johns Hopkins UP, 2014.

**[English Synopsis]**

## The *Metahistorical* Imagination in Nineteenth-Century Medievalist Poetics

SEKI Yoshiko

Medievalism is a Victorian coinage. When the word started to permeate that age, it was used in contrast with Classicism. If we focus on Victorian poetry, however, we realize that those who are defined to be Medievalist poets —Matthew Arnold, Alfred Tennyson, and William Morris among others— did not always focus on the Middle Ages; instead, their poetical imagination derived also from Ancient Greek and Roman mythologies. That tendency was aptly expressed by Walter Pater as “the Hellenism of the middle age” in his review of Morris’s poems (Pater “Poems” 87). Why did they look for their poetical motifs in the past? And why was their attitude called Medievalist? This paper addresses these questions by reinterpreting Medievalist poetics from the historical discourse in the nineteenth century continental Europe.

First, to find a clue to the second of these questions, a survey is conducted into how Medievalism Studies was established in the 1970s. It emerged and distinguished itself from its long-established parent, Medieval Studies. While Medieval Studies focuses on the actual or historical Middle Ages, Medievalism Studies seeks into the Middle Ages “found” or “made” in later eras. This is one of the reasons why Medievalism has not been fully considered in the historical discourse; the study of Medievalism started when “ideas of ‘the medieval’” were surveyed “as a conceptual rather than

a historical category” (D’Arcens 2). This partly answers the question why such poetical motifs have been named simply “Medievalism,” too; the word indicated not the motifs expressed in such poems but the antiquarian impulse found in those poets.

Next, the attention is turned to Hayden White’s *Metahistory: The Historical Imagination in 19th-Century Europe* in order to find a framework to compare Victorian Medievalist poets’ historical imagination with that of contemporary European historians. Applying Hegel’s philosophy of history, White analyses the nineteenth-century historiography in poetical terms. He also states that historians strived “to illuminate the present by adducing to it analogies from the past” (99). This application of history to the present is similar to Arnold’s assertion that in order to find “an excellent action” poets should seek for one in “a thousand years ago” (Arnold *Poems* 657).

White’s *Metahistory* analyzes the historiography of Michelet, Ranke, Tocqueville, and Burckhardt. Michelet’s belief of historians’ role being magistrates who exhume the dead for a second life (White 159) is similar to Morris’s way of focusing on anonymous soldiers in ancient legends. The ways how Ranke conceived history in the Synecdochic mode (178) and how Tocqueville mediated not only between the past and the present but between the present and the future (206) recall the way how Medievalist poets dealt with past motifs as a part of the present. Burckhardt’s historiography of laying historical pictures as mere reflections of his own era (259) is also resonant with Victorian poets’ use of past motifs. White says that in the “disciplinization of the field of history, England lagged behind the Continental nations” (136). We can find, however, a similar kind of historical consciousness with that of European historians in Medievalist poetics.

## 本誌 *Osaka Literary Review* 電子化・公開のお知らせ

本誌過去号掲載論文電子版（PDF ファイル）の公開が、大阪大学学術情報庫 OUKA（Osaka University Knowledge Archive）にて2013年8月より開始されました。

これまで、お手紙にて電子化を周知するとともに過去本誌に掲載された論文著者の方々に対し OUKA に掲載するご許諾をお願いして参りました。その後、著者及び関係者の皆様のご理解とご協力をいただきまして、電子化および掲載の作業を完了致しました。本誌掲載論文は、原則として OUKA 上にて全文公開いたします。尚、OUKA のサイト・リニューアルに伴い、2017年9月より旧 URL (<http://ir.library.osaka-u.ac.jp/web/OLR/index.html>) から新 URL (<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>) へ移行致しましたのでご注意ください。

なお OUKA に掲載することで著作権の移動は一切発生せず、附属図書館および OLR 同人会は著作権者から公衆送信権と複製権の許諾を得るだけです。著作権者からの指示があれば即時無条件に OUKA から削除できることを申し添えます。許諾取消やご意見等ございましたら、下記連絡先までお知らせください。

〒560-8532

大阪府豊中市待兼町1-5

大阪大学文学部英米文学・英語学研究室内

OLR 編集委員会

E-mail: [olrdoujin@hotmail.com](mailto:olrdoujin@hotmail.com)

## ■ 執筆者紹介 ■

関 良子（せき よしこ） 高知大学准教授  
田中 和也（たなか かずや） 熊本県立大学准教授

## ■ 編集後記 ■

*Osaka Literary Review* 第60号をお届けいたします。ご寄稿いただいた方々に厚く御礼申し上げます。

OLRは編集委員会制を採用しております。今回は11名の編集委員会で編集に当たり投稿論文を査読致しました。今後とも同人一同、互いに切磋琢磨してレベルの高いジャーナルをめざしていきたいと願っております。ご高覧いただいた皆様からの忌憚ないコメントをお待ちしております。

本誌過去号掲載論文は、2013年より大阪大学学術情報庫 OUKA において公開され、第1号（1962年）から第54号までインターネット上で読むことができます。またこの度2016年より、OUKA上で公開されている論文に、学術的な電子データに付与される国際的識別子である DOI (Digital Object Identifier) が付与されました。これにより、リンク切れを防ぐことができ、論文への永続的なアクセスと利便性の向上、情報発信力の向上が期待されます。ぜひご利用ください。

### OLR第60号編集委員会

片渕 悦久（委員長）、岡田 禎之、山田 雄三、  
石割 隆喜、田中 英理、Paul Harvey、森本 道孝  
西口 暖乃、徳永 和博

# *Osaka Literary Review* 第60号

---

令和4年1月31日 発行

編集者 大阪大学文学研究科英米文学英語学研究室  
発行者

発行所 大阪府豊中市待兼山町1番5号 (〒560-8532)  
大阪大学文学部英米文学・英語学研究室内

印刷所 (株) 昭 和 堂

---